

1 音楽科で願う豊かな学びの姿

私たちは、11年間の学びを考えたとき、「無邪気に音楽を楽しみ、心をわくわくドキドキさせ、あこがれをもって『音楽っていいなあ』『表現するって気持ちいいなあ』と純粹に感じる心と豊かな表現力が育つ」ことを願っている。そこで、日々の授業や音楽活動における子どもたちの様子を観察する中で、音楽科として求める「豊かな学びの姿」を次のようにまとめた。

- 仲間と一緒に楽しく活動しようとする姿。
- 音楽活動に進んで取り組もうとする姿。
- 表現や鑑賞に必要な知識や技能を身に付けようとする姿。
- よりよい音楽表現のために工夫しようとする姿。
- 音楽活動の楽しさや感動を味わおうとする姿。
- 音楽を生活の中に取り入れようとする姿。

このように、音や音楽から感じるものを言葉で伝え合いながら音楽表現を工夫していく学習を通して、他者の意見を聞きながら自分の感じ方を深め、思いや意図、音楽表現にこだわりをもって高まろうとしていく姿を目指している。

また、一貫教育の観点から、発達段階による思考力・判断力・表現力の違いを踏まえ、つながりを大切にした学習指導を目指していきたいと考え、研究を進めている。

2 音楽科における思考力・判断力・表現力とは

音や音楽を聴いてイメージをふくらませたり、楽譜を見て理解したりする力を思考力とした。そして、イメージしたものを音楽表現へとつなぎ、音楽表現するための音素材や音楽を形づくっている要素を選んだり、音楽表現を工夫したりする力を判断力とした。表現力は、判断した音素材や音楽を形づくっている要素の技能的側面を用いたり、思いや意図、イメージを表出したりしていく力である。

音や音楽を聴き、イメージをふくらませる中で、瞬時に自分なりにその音や音楽を感受することが多々ある。このように思考と判断は分かれることなく、ひとまとまりでくることができるととらえた。また、思考力・判断力・表現力のサイクルは、思考力から表現力への一方通行ではなく、それぞれの間を行き来しながらより高い段階へと発展していくものと考えている。

一貫教育の観点から、それぞれの発達段階での思考力・判断力・表現力を次のようにとらえている。

初等部前期	音楽を感覚的にとらえ、音楽やその演奏の楽しさを感じながら表現することができる力。
初等部後期	思いや意図をもって、曲想にふさわしい表現を考えたり、自分や友だちの考えを取り入れたりしながら表現することができる力。
中 等 部	自分の表現意図を曲想と関わらせ、知識〔共通事項〕・技能を活用して表現することができる力。

初等部前期での思考力・判断力・表現力は、感覚的に音楽をとらえる力が主であり、これがその後の学びの姿のベースになっていく大切な部分である。そして、初等部後期では思いや意図を明確にもてるようにし、自分と他者の考えや表現を比較しながら思考をより高い段階へと発展させていく。さらに、中等部になると自分の表現意図を曲想と関わらせ、これまでに学んだ知識や身に付けた表現の技能を活用して言葉や演奏で表現していく。このように、初等部前期から中等部までの発達段階における思考力・判断力・表現力の違いやつながりを意識すると共に、一貫教育における積み上げを大切にした学習活動を展開していくことが重要であると考えている。

思考力・判断力・表現力の評価は、「音楽表現の創意工夫」の観点の評価規準によって行っている。子どもの観察や発言、ワークシートの記述、録音・録画などによって子どもの変容をとらえている。1時間の学習の中で「よく歌うようになった」「強弱をつけて演奏できた」などの変容をみることはある。しかし、思考力・判断力・表現力は、すぐに育成されるわけではなく、ある程度のスパンでみていく必要がある。そこで、題材を通して思考力・判断力・表現力の高まりを評価することとした。具体的には、音楽を形づくっている要素を知覚し、それ

らの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取れているか、曲想にふさわしい表現を工夫し、どのように表すかについて自分の考えや思い、意図をもっているかなどをとらえる。

3 思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 学びをいかす

音楽科において学びをいかすとは、感じ取ったり、気付いたりしたことをもとにして、さらにその音楽表現を工夫したり高めたりすることである。言い換えれば、自分の考えや思い、意図を確かめるために繰り返し試し、よりよい音楽表現を追求することである。例えば、ある曲の演奏をグループで発表した際に、感じ取ったそれぞれのよさを言葉で伝え合い、そのよさを自分たちの演奏にも取り入れてみようとする。また、ある歌唱の演奏として「なめらかな表現」を求めるとき、一言で「なめらか」といってもその演奏は様々である。その曲の特徴や雰囲気、歌詞の意味などから「なめらかさ」の度合いを吟味し、そのなめらかさを実現するための技術的な試行錯誤を繰り返し、さらに聴き合いを繰り返し、考えや思い、意図に近づくための高め合いを行うような姿を目指している。

(2) 学び合い

学びをいかすための授業構想として、思考・判断し、表現する学習プロセス（図1）を重視している。この学習プロセスにより、音楽的な感受をもとによりよい音楽表現を求めて思考・判断・表現を繰り返すことでより高い段階へと発展していく。この学習プロセスのスタートは、子どもの主体的な聴き取りから始まっており、どう学習課題に出合わせるかが大切となる。

この学習プロセスをベースにして下記の3点について追究している。

① 音楽を形づくっている要素の焦点化

音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素や反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組み、音符、休符、記号や音楽に関わる用語のうち、題材のねらいに即した要素に焦点を当てた授業を構想する。

② 音楽的な感受ができる提示の工夫

子どもたち自身が音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取れる教材や聴き比べなどで提示する参考演奏（音源）の選択をする。また、類似したものを聴かせたり、逆に相反するものを聴かせたり、その聴かせ方を工夫する。

③ よりよい音楽表現を求める活動の設定

個→グループ（ペア）→全体→グループ（ペア）→個などの「行きつ戻りつ」の繰り返しを「往還」とよび、重視している。この繰り返しの活動形態をより子どもたちの実態（発達段階、意欲、音楽体験度など）や題材のねらいに即して取り入れる。

(3) 教師のはたらきかけ

子どもたちが互いに感じたことや思ったことを比較したり、関連させたりするための教師の発問の工夫や受け止めが大切である。ペアやグループによる活動において、感じ取る部分を限定して焦点化させる（提案する）はたらきかけと、ペアやグループの演奏の仕方の違いから、演奏のよさを感じ取れるようなはたらきかけを行うことによって、子どもたちはより互いのよさを感じ取ることができる。また、子どもたちの感じ方や表現を認める教師の姿勢と、子どもたち同士の言葉をつなげていく教師のはたらきかけが大切である。

（文責 小村 聡）

【参考文献等】

- ・大熊信彦「音楽科の移行期最終年度の実践課題とその対応」『初等教育資料』東洋館出版社、2010
- ・津田正之「音楽科における指導要録改善のポイント」『初等教育資料』東洋館出版社、2010
- ・伊野義博「思考・判断し、表現する一連のプロセスの実際と展望」『中等教育資料』ぎょうせい、2010

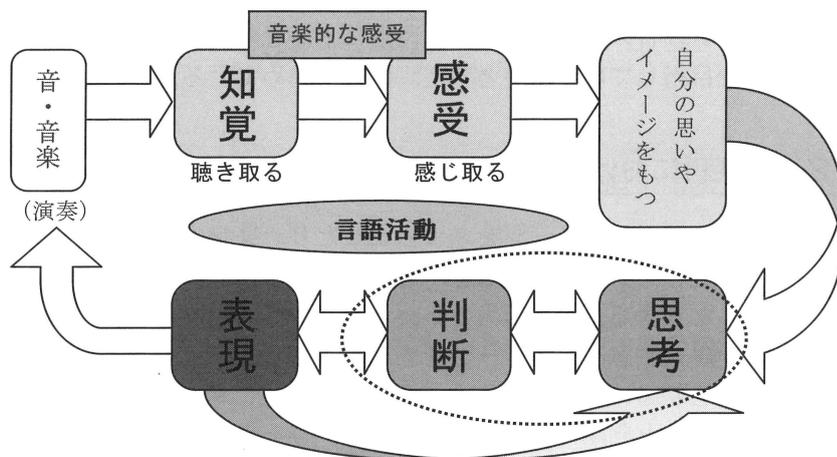


図1：学習プロセス